

老朽原発5基廃炉へ

運転40年 島根1号機など

九州電力は10月に運転開始から40年を迎える玄海原発1号機(佐賀県)を廃炉にする方針を固めた。同じように廃炉か運転延長かの判

断を迫られている老朽原発計6基を抱える関西、中国、日本原子力発電(原電)の電力3社も、関西高浜原発1、2号機(福井県)を

除く4基について、廃炉にする方向で地元自治体との調整に入る。各社とも年度内に正式決定する見通し。▼3面||再稼働へ地ならし

東京電力福島第一原発の事故を受け、政府は原発の寿命を運転開始から原則40年と法律で定め、最大20年の延長を認めることにした。来年7月時点で40年を超える原発計7基は、今年7月が延長申請の期限で、廃炉にするか運転延長するか判断を迫られていた。

必要となるため、廃炉にした方がよいと判断した。今後、玄海原発がある佐賀県や同県玄海町との協議に入り、年度内に取締役会で正式に決める見通しだ。

7基中4基を抱える関西高浜原発1、2号機については運転延長をめざす。低出力の美浜原発1、2号機(福井県)は廃炉に向けて地元調整を始める。中国電は、建設中の島根原発3号機(島根県)の新たな稼働をめざしており、古い島根原発1号機は廃炉にする方向だ。運転開始から44年がたつ原電の敦賀原発1号機(福井県)は、東日本大震災の前から、来年中に運転を停止し、その後廃炉にする方針だった。

政府は、こうした古い原発の廃炉を後押しすることで、比較的新しい原発の再稼働への理解につなげたい考えだ。